

# アフリカ最大級の都市型スラム・キベラに暮らす若者が “語る主体”として東京で展示！

## 12名のアーティストが自らの視点で記録した写真・映像展

アートワーカー(企画者)向けプログラム「CRAWL」選出企画

「キベラ“スラム”から見つめる世界 — 語られてきた私から、語る私へ。—」

キベラ“スラム”から  
見つめる世界

企画：坂田ミキー / Miggy Sakata

語られてきた私から、  
語る私へ。

Asinina Ibrahim / Big\_davido / Dizze Dizze / Frankline Olando /  
Ismael Photography / Mc Popo / Ramkalino KE / Ramadhan Said Ali /  
Sir.jeree / Steve Banner / Vin Sekani / BKTV KIBRATV

2026.4.25 SAT — 5.31 SUN

CRAWL BUG

「CRAWL」は、株式会社リクルートホールディングスが運営するアートセンターBUGが行っているアートワーカー(企画者)向けのプログラムです。企画書をコミュニケーションツールとして、メンターとの壁打ちや参加者同士のピアレビュー、ネットワーク構築などアートワーカーの機会と場をつなぎ、未来へつづくつながりを形成していくことを目的としています。

「CRAWL」で選出された坂田ミギーによる「キベラ“スラム”から見つめる世界 ―語られてきた私から、語る私へ。―」を2026年4月25日より開催いたします。本展覧会では、ケニアの首都ナイロビにある巨大スラム・キベラに暮らす若者たちが撮影した写真・映像を通じて、「語られてきた存在」としてのスラム像を問い直し、「語る主体」として立ち上がります。

多くの若者が「将来の夢はジャーナリスト」と答えるのは、自身の存在を社会から無視され疎外されてきたという実感があるからです。寄付によって集まったカメラと、プロの写真家・映像作家による技術指導をきっかけに、彼女/彼らは自身の暮らし、よろこびや苦しみ、働く姿や生きる希望を記録しはじめました。これは単なる記録ではなく、「語る力」を獲得していく過程そのものであり、これまで外部の視点によって一方的に消費されてきた「スラム」のイメージを、自らの手で再定義していく行為でもあります。

本展では、100点を超える作品と、アーティスト自身による作品解説映像などを展示します。会期中には、キベラで暮らす若者に聞いてみたいことを質問し、後日返事が届く“対話”の機会を設けるなど、被写体と観客のあいだに「語りの往復」が生まれる場をつくりだします。東京の中心とはかけ離れたケニアのスラムでの視点をBUGのホワイトキューブに持ち込むことで、「表現すること」の根源的な力、そして、よろこびを問い直す試みです。

## 展覧会のみどころ

### 1. ラベリングされた風景の再発見

「スラム」という言葉から、多くの人が思い浮かべるイメージは、貧困や犯罪、希望のなさといったステレオタイプなものかもしれません。しかし、その言葉によって一括りにされてきた場所のなかにも、人々の営みやよろこび、誇りといった多様な瞬間があります。

本展では、キベラで生まれ育ったアーティスト自身が、自らの視点で日常の風景や伝えたい物語を作品として表現します。なかには、自身で脚本を手がけ、映像制作に取り組んだ作品も含まれています。

キベラは世界的に知られる都市型巨大スラムであり、これまでも著名な海外アーティストがキベラを舞台とした作品を生み出してきました。しかし本展では、キベラを「素材」や「舞台」として扱うのではなく、そこに暮らす人々が自らのコミュニティや経験を語る主体となることに焦点を当てます。

### 2. 制約のなかで生まれる表現の輝き

出展するアーティストの多くは、自身のカメラやパソコンを持っておらず、限られた自己資金でレンタルした機材や、限りあるデータ通信量のなかで制作を行っています。また、高解像度のデータを保存するためのストレージを持たない場合も多く、気軽に多くの作品を高解像度で保存できる環境にはありません。

そのため、展示作品のなかには、画質や編集の面で差異として知覚されるものも含まれています。しかし、それは個人の技術や意欲の有無によるものではなく、利用可能な機材やソフトウェア、通信環境といった制作条件の違いによって生じています。

どのような環境にあっても、人は表現し、創作することができます。一方で、使用できるツールや制作手段の制限は、作品の画素数や解像度、映像表現の幅といった部分に影響を与えます。

### 3. 作品の見え方と評価の変化を体験する

作品の背後にある制作環境や背景を踏まえて鑑賞することで、同じ作品であっても、その見え方が変化していく体験を提示します。もし制作環境や社会的背景を知らずに作品を見た場合、画質や音質、編集の手法といった形式的な要素が、技術的な完成度として捉えられてしまうかもしれません。しかし、それらがどのような制作条件のなかで生まれているのかを知ったとき、作品に対するまなざしは変化します。

本展は、解像度や編集手法といった形式的な基準だけでは捉えきれない表現の価値に触れることで、鑑賞者自身が無意識に持っている評価の前提や、作品を見る際のまなざしを見つめ直すきっかけとなることを目指します。

## 関連イベント

### ■トークイベント

「レンズを介した対話 — キベラの若者との交流で見えてきたこと」

2026.5.9(土)19:00~20:30

登壇者:池谷常平(ビデオグラファー)、政近遼(フォトグラファー)

司会:坂田ミギー

「キベラとともに歩んだ30年」

2026.5.17(日)15:00~16:30

登壇者:早川千晶(社会活動家 / ジャーナリスト)

司会:坂田ミギー

「ともにつくる仲間としてのキベラ」

2026.5.23(土)19:00~20:30

登壇者:藤井賢二(株式会社たきコーポレーションCDO / クリエイティブディレクター)

司会:坂田ミギー

「アーティスト・イン・レジデンス成果発表」

2026.5.30(土)19:00~20:30

登壇者: Sir.jeree(フォトグラファー)、Frankline Olando(フィルムメイカー)

司会:坂田ミギー

### ■企画者によるガイドツアー

2026.4.26(日)15:00~15:30

2026.5.9(土)15:00~15:30

2026.5.23(土)15:00~15:30

ガイド:坂田ミギー

詳細・予約方法はウェブサイトやSNSでご案内します。

## 企画者・坂田ミギーからのメッセージ

本企画は、ケニア・ナイロビのキベラにおいて約13年にわたり教育支援や表現活動に関わるなかで、外部の視点から語られてきたキベラではなく「ここで暮らす人々にしか語り得ない経験や風景があるのではないか」と考えてきたことに端を発しています。キベラに暮らす若者やアーティストが、自らの視点で日常や社会を記録し、発信できる機会を創出することを目的に、本企画の構想が進められました。

その具体的な取り組みとして、映像作家の池谷常平およびフォトグラファーの政近遼が中心となり、日本国内で使われなくなったカメラを収集・寄付するとともに、現地の若者に向けた写真・映像制作の技術指導を行うプロジェクト「KIBERACTION」を実施しています。本プロジェクトの一環として、2025年4月および2026年1月にワークショップを開催し、ムービーおよびスチール撮影の基礎的な技術レクチャーに加え、参加者自身による企画立案や撮影実習を行いました。

寄付されたカメラは現在、現地メンバーによって共同管理されており、申請制で共有利用できる仕組みのもと、継続的な制作活動に活用されています。ワークショップ参加者の中には、自ら脚本を執筆し、出演者を募り、寄付された機材を用いて短編映像作品を制作するなど、主体的な創作活動を行う若者も現れました。こうした姿を目の当たりにするなかで、キベラに暮らす人々自身が、自らの経験や視点をもとに地域を語る作品を生み出し始めていることを実感しています。

このような取り組みを踏まえ、キベラに暮らすアーティスト自身が、自らの視点で地域について語る展示を実現したいと考えていました。そうしたなか、アートセンターBUGが主催するアートワーカー(企画者)向けプログラム「CRAWL」において本企画が選出されたことで、東京での展示機会が実現しました。

これを受け、ワークショップ参加者に限らず、すでにキベラで写真家や映像作家として活動しているクリエイターにも広く呼びかけを行い、日本での展示機会を通して自らの作品や視点を発信したいと考える人々から応募を募りました。その結果、32名から応募が寄せられ、書類選考および対面形式のオーディションを経て、最終的に12名のアーティストを本展の出展者として選出しています。

本展では、こうしたプロセスを経て展示される写真・映像作品を通して、キベラに暮らす若者たちの経験や視点に基づく表現をご覧ください。

### ■坂田ミギーのこれまでの取り組み

坂田ミギーは、2013年にケニア・ナイロビのキベラを初訪問して以降、現地コミュニティと親交を深めてきました。2018年より経済的困難を理由に生理用品を入手できず、学校を欠席せざるを得ない女子生徒に対する生理用品の提供および月経教育の支援を開始。2022年には、持続可能な支援の仕組みを構築することを目的に、エンカル・クリエイティブ・コレクティブ「SHIFT80」を立ち上げ、キベラの人々と協働した制作活動を行っています。これまで、日本のフォトグラファーや映像作家とともに、現地の人々とコラボレーションした撮影や映像制作など、共同で作品を制作する機会を創出してきました。

その後、奨学金の支援や学校運営のサポート、子どものためのレスキューセンターの運営支援など、教育機会の確保に向けた取り組みを継続的に行っています。

また、就業機会が限られた環境のなかで、日雇い労働などのインフォーマルセクターに従事する人々が多い現状を踏まえ、現地でのマイクロビジネスの起業支援にも取り組んできました。

こうした継続的な関わりや協働の経験を通じて、外部のクリエイターとともに制作を行うだけでなく、キベラに暮らす人々自身が自らの視点で地域について語る機会の必要性を認識したことが、本企画の構想へとつながっています。

## 企画者プロフィール



### 坂田ミギー／Miggy SAKATA

NPO法人SHIFT80代表理事 / 株式会社こたつ共同CEO クリエイティブディレクター  
Sler、広告制作会社、博報堂ケトルを経て、株式会社こたつを設立。

旅の途上で出会ったアフリカの孤児・貧困児童と女性へのサポートを目的としたエシカル・クリエイティブ・コレクティブSHIFT80ファウンダー、NPO法人シフトエイティ代表理事。

旅やキャリアに関するエッセイ執筆、講演のほか、キャンピングカーをモバイルオフィス&家として、日本各地を旅しながら働くスタイルを実践中。

著書:「旅の良書2020」に選出された世界一周旅行記『旅がなければ死んでいた』(KKベストセラーズ)、『かわいい我には旅をさせよソロ旅のすすめ』(産業編集センター)など。

受賞歴:Forbes JAPAN 2025年「NEXT100:100通りの世界を救う希望」、価値デザインコンテスト グランプリ・経済産業大臣賞、第11回女性社長アワード「J300アワード」、Cannes Lions、New York Festivals International Advertising Awards、Spikes Asia、Ad Fest、広告電通賞など。ACC2022審査員。

## 関係者プロフィール



### KIBERACTION

キベラクションは困難な状況にある若者のクリエイティブ活動を支援するコレクティブ(集合体)。映像作家・池谷常平と、フォトグラファー・政近遼を中心とした映像や写真のプロフェッショナルで構成され、2024年5月に発足。自分たちの持つスキルや経験を、仕事とは異なるかたちで活かすことを目的に、主にケニアのキベラスラムにて活動をつづける。



### 堅田真衣／Mai KATADA

2013年 博報堂入社。2013年から2017年までHAKUHODO DESIGNに在籍。代表・永井一史のもとで企業や商品のブランディングに携わる。2017年からは博報堂本社でデザイナー／アートディレクターとして、ブランディング、グラフィックデザイン、CI・ロゴマーク開発、商品パッケージデザイン、TV-CM、プロモーションなど幅広い領域のクリエイティブを担当。

クリエイティブ業務と並行して、自宅を開放し、古書と新刊を扱う書店兼ブックコミュニティ「Daily Practice Books」を運営している。

## 出展アーティスト(予定)

アシニナ・イブラヒム／Asinina Ibrahim  
 ビッグ・ダビド／Big\_davido  
 ディジー・ディジー／Dizze Dizze  
 フランクリン・オランド／Frankline Olando  
 イスマエル・フォトグラフィー／Ismael Photography  
 エムシー・ポポ／Mc Popo  
 ラムカリノ・ケーイー／Ramkalino KE  
 ラマダン・サイド・アリ／Ramadhan Said Ali  
 サー・ジェリー／Sir.jeree  
 スティーブ・バナー／Steve Banner  
 ヴィン・セカニ／Vin sekani  
 エイトケーティーヴィー・キベラティーヴィー／8KTV KIBRATV

## 作品画像



撮影:ディジー・ディジー／Dizze Dizze



撮影:サー・ジェリー／Sir.jeree



撮影:エイトケーティーヴィー・キベラティーヴィー／8KTV KIBRATV



撮影:ラマダン・サイド・アリ／Ramadhan Said ALI

## ■展覧会概要

・タイトル：

アートワーカー(企画者)向けプログラム「CRAWL」選出企画  
キベラ“スラム”から見つめる世界 ―語られてきた私から、語る私へ。―  
<https://bug.art/exhibition/crawl-sakata/>

・会期：2026年4月25日(土)～5月31日(日)

・主催：BUG(株式会社リクルートホールディングス)

・共催：SHIFT80

・協力：KIBERACTION、Daily Practice Books

・開館時間：11:00～19:00 火曜休館 入場無料 ※ただし5月5日(火)は開館します。

BUG

〒100-6601

東京都千代田区丸の内1-9-2 グラントウキョウサウスタワー1F

Gran Tokyo SOUTH TOWER 1F, 1-9-2, Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo

### 交通アクセス

JR東京駅八重洲南口直結

東京メトロ京橋駅8番出口から徒歩5分

東京メトロ銀座一丁目駅1番出口から徒歩7分

### <施設情報>

・BUGはオフィスビル1階にあり、入り口から段差なくアクセスできます。カフェの奥に広がる空間がBUGです。

・授乳室は設置していません。

・多目的トイレはビル内の同フロアに1つあります。(おむつ交換台、ベビーチェア、オストメイト設置)

・トイレは地下1階(八重洲地下街)に複数あります。エレベーターまたはエスカレーターが利用できます。

・BUGには専用駐車場はありません。ご来館には公共交通機関をご利用ください。

※BUGでは様々な事情を持つ皆様をお迎えできるよう、スタッフが可能な範囲でサポートや情報提供に努めています。

---

お問い合わせ先:株式会社リクルートホールディングス リクルートアートセンター 広報担当

Mail : [info.bug@r.recruit.co.jp](mailto:info.bug@r.recruit.co.jp)